
ノエルエデン～平和の代償～

しーご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノエルエデン〜平和の代償〜

【Nコード】

N6618Z

【作者名】

しーご

【あらすじ】

完全平和の国「ノエル」

遺伝子操作により人類は生まれた意味を与えら、それに殉じて生きる世界。

既に決められていた運命の中で、未来に対する不安が解消され、悩み、苦しむ事無くなり、個人の主張により対立や戦争が完全に消滅した。

そして自由すらも失った世界で少年は「運命」の力を覚醒させる。

※不定期更新ちゅう

2011年11月23日執筆開始。

ページ単位で作成している為、話単位になると莫大な文字数になってますw

Prologue (編者あ)

< i 3 7 5 3 1 | 4 7 0 9 >

prologue

人には、それぞれこの世に生まれてきた「意味」というモノがある。自分が何の為に生まれてきたのかを、生きる意味を知る必要がある。それを知らない人類は、意味を模索する為に足掻き、迷い、衝突する。

人が生まれでたその瞬間から、個人が持つ先天的な適性と能力を遺伝子レベルで調査し、その解析結果を基にその人を最適な職業や役割に就かせ、より効率的な社会運営を行った。

この政策により決められた運命の中で、未来に対する不安が解消され、悩み、苦しむ事無く生きる事が可能となった。

それらから派生する全ての摩擦は消滅し、人類はすべてがわだかまり無く生存する世界を手に入れた。

完全平和の世界「ノエル」

凄惨な歴史を繰り返した人類が辿り着く究極の世界なのである。

完全平和の世界

小型端末のディスプレイに映し出された情報は、明日から始まる現場訓練の予定表だった。

午前9時までに訓練施設B館に出所。午前9時30分からプログラム言語の基礎知識講習が始まり、続いて次世代C言語の実習。

昼休憩を挟んで、午後1時から遺伝子工学の基礎知識講習。

午後3時から世界史の講義、午後5時30分にすべての訓練科目が終了し、帰宅。

夕飯のサラダを食べながら、きっちりと定められたタイムスケジュールに目を通し、その内容を頭に叩き込んだ僕は明日の起床時間を何時にするか考えていた。程度の満腹感を感じながら、小型端末をポケットにしまい、台所に立つ母親へ目を向けた。

「ごちそうさま、と母親に声をかけ、食器を台所に運んだ僕に母親はコクリと頷き、家族が食し終わった食器を洗い続けた。ちらりと僕の顔を見て「明日寝坊したらダメだよ？今日は早く寝なさいね。」と釘を刺す様に母親はつぶやいた。体を自分の部屋に向けた僕は「わかってるよ。今日は明日の用意して寝る！」とだけ返事をした。深々とソファに座っているのは父親で、無言でテレビの画面に入っている。走査線に映っている映像は、派手な服装で綺麗な容姿をした女性2人が激しく踊って流行りの歌を歌っている。父親にそんな流行りのモノに興味があったのか、と意外に思いながら僕は自分の部屋に戻った。

僕の名前はエミリオ先月で18歳になる。生後調査された遺伝子情報から、「遺伝子研究とその実用化を進める役目」を与えられている。その将来の為に今はその専門訓練を受ける毎日を送っている。

明日から始まる、研究所での訓練に僕は期待と興奮を隠しきれなかった。何回も何回も明日のスケジュールを確認し、研究所に務める先輩達に聞くつもりでの質問を確認していた。

僕に与えられた使命。この国の完全な平和を未来永劫に維持する為に与えられた素晴らしい天命だと、僕は自覚している。

とても素晴らしいじゃないか。国民すべてが安全に平和に豊かに暮らせる様に僕は努力する。生まれたその時から、神様は僕をそんな風に作ったのだから。

充実している。何も不満なんて無い。みんなそうだ。この世に生まれた瞬間に、自分の役割が決まっている。そしてそれが「運命」や「使命」という言葉になりみんながそれらを「誇り」としている。

将来の不安、他人との能力差からの嫉妬、主張の相違…この世界にはそんなモノはない。効率良く進む社会の流れは、全ての人々に幸せを、永久の平和を約束しているだ。

午前7時ちょうどにアラームの高い音が部屋を満たした。

かなりの眠気を感じながら、僕は布団から抜け出し朝の支度を始めた。母親に早く寝ろと釘を刺されていたのだが、結局遺伝子工学の教本を読み漁ってしまい予定より3時間も睡眠時間がなくなってしまった。リビングに行くと、すでに父親は作業着に着替え出発の準備をしている。父親の仕事は物流経済の管理者で、システム化された物の流れを管理し、イレギュラーがあれば用意されたパターンからの確な指示を与え、物流の流れを常に効率良く動かしていくのが仕事だ。

父親も出生した時の遺伝子解析により、幼少から物流経済の訓練を受け20年間職務を務めている。母親とはその訓練施設で知り合ったらしいが、詳しい事は知らない。

ただ、僕が生まれて遺伝子解析から技術者の天命を与えられた時は大喜びしていたらしい。

「世界平和の継続に直接携わる大事な天命」だと。

身支度を済ませた僕は、母親が毎日焼いてくれるこんがり焼いた食パンとホットコーヒーが置かれたテーブルについて。

「いってきます！」

支度が出来た父親はいつもの時間に玄関を出た。一言だけ僕に、頑張ってこい。と言ってくれた。

今日から本格的な訓練が始まる。実際に技術研究所に出所し、現場の仕事を見ながら学ぶ訓練。僕が生まれた時に決まっていた運命の役目だ。すこし気合を入れる為に、苦いコーヒーを一気に飲み干した僕は、父親の後を追う様に玄関を飛び出した。希望と期待を体全体で感じながら、僕は研究所に向かうバスに飛び乗った。

研究施設に向かうバスの中で、聞きなれた声が聞こえてきた。

「エミリオおはよう！」

僕と同じぐらいの背丈で型まで伸びたサラサラの黒い髪、細いラインでスタイルの良い体は同年代の異性なら目を向けてしまうだろう。

「おはようレイチェル。今日も素敵な営業スマイルだね。」

彼女の顔も見ず返答した僕を見て、レイチェルは不機嫌そうに「相変わらず無愛想ね」と返した。

横で同じスピードで並走しているトラックを見ながら

「今日から現場訓練が始まるのか？」と場繋ぎ的に質問した。

「そうよ。今日から！女性衣料品の接客販売訓練なの。ほんとに楽しみだわ！私の天命だもの！」と嬉し

そうにはしゃぐレイチェルを見て、少し口角を上げてしまった。

「カズマって車の整備実習終わったのか？あいつこないだの訓練でミスやったらしくて、ひどく落ち込んでたぞ」

僕が珍しく話題を振ったのが嬉しかったらしく、狭い車内で体ごと近づいてきたレイチェルは「大丈夫でしょ！1回の失敗ぐらいでヘコたれるヤツじゃないわよ！」と活発な声を発した。

それもそうだ。と声も出さずに思った僕は再び窓の外を見た。さっきまで並走していたトラックは左折し、目的地に向かっていった。その後ろを走っていた乗用車が僕の乗っているバスを追い越していった。

世界は非常に安定している。なんの無駄もなく、動く世界。街を歩く人も車も、すでに決められてる運命を全うするために動き続けている。

次の信号を過ぎれば、僕がこれから通う事になる研究所がある。白くて立派な15階建てのビルだ。ビルが見えてきたのを確認して僕はくっついていたレイチェルを押す様に引き離れた。

少し寂しそうにしていたレイチェルを見て「まあ頑張れよ」と一声かけ、うん！と嬉しそうに返事をしたレイチェルを見て僕は乗降口に向かった。ゆっくりと減速したバスは停車位置に向かった。

運転手の男

停車地点を示すバス停が視界に入り、降りる用意を始める。同じバス停で降りる他の人も少なからずいるみたいだ。レイチエルには何も言わず、僕は目線だけで挨拶して乗降口に向かった。

バスは左方向の指示器を点滅させながらバス停に寄り始める。だが、バスは減速ではなく、延びの良い加速を始めた。僕を降ろすはずだったバスは、停車場所であるはずの研究所前をバスは何事も無かったかの様に過ぎ去った。

僕はえ？となり、どんどん遠くなっていく研究所の白い建物を目で追いかけた。

僕を含めて、ざわっとするバスの乗客。レイチエルもキョトンとした顔で僕を見つめていた。無意識にレイチエルの顔を見てしまった僕はハッとなり、一体何が起きているのかわからず、僕はすぐ後ろで運転しているバスの運転手を見た。

バスの運転手は右手でハンドルを握り、左手は通信無線であろう機械をすでに叩き潰している。潰された無線を見た僕の目線が再び運転手に戻った時、運転手も僕の顔を目線だけで見ていた。

「ハローエミリオ君」

ニヤッと笑った運転手の一言を聞いた瞬間、バスが物凄い高い音を立てながら急停止をした。前のサスペンションが沈みきり、大きなバスの車体は数秒ほど前のめりになり、ガダン！と大きな音を立てて後輪を地面に叩きつけた。満席の乗客は体制を崩し、悲鳴を上げながら倒れこんだ。僕は無意識に乗降口にあった支えにしがみついて、転倒を防いでいた。

恐らくバスの運行を管理している会社が異変に気づき、バスを強制的に停車させたのだろう。後続車両も急にバスが止まったので、急ブレーキをしていた。今まで順調に進んでいたのに、1台のバスが予定外の停車をして静まり返る主要幹線。

若干の腕の痛みを覚えた僕は、ちらつと自分の腕を見て再び運転席に視線を変えた。するとさっきまで運転席に座っていた男はいつの間にか僕の目の前に立っていた。長身の男は制服の帽子の影から見える鋭い眼光を僕の顔に向けていた。

「あんたは…!？」

眼光の威圧に押されたのか、思わず口走った僕は男の制服の襟を掴んで立ち上がった。ニヤッと笑った男の顔を見て若干の怒りを覚えた僕は「この…!」と声を発し痛めた右腕を振り上げ様とした。

だが、その時すでに男は僕の右腕を掴んでいた。男はゆっくりと口を開き「ハッピーハッピーバースデー」と一文字一文字を丁寧に発音する様に僕に囁く。その言葉の意味を考えようとした瞬間に、右腕に痛みが走った。

さっき転倒した時の打撲の痛みとは違う別種の痛覚。体の中に何かが侵入する、そう細い何かで刺された様な痛みだ。ビククリした僕は「うわあ!」と叫び、掴まれていた右腕を振り払い、乗降口のギリギリまで飛び下がった。

なにかの液体が入っていたらしい注射器の様な物を男は左手に持っていた。恐らくそれで右腕を刺されたのだろう。そしてその注射器に入っていた液体が僕の右腕の血管に注入された。

(一体何の薬だ?もしかして毒か?何が目的なんだ?)

声も出さずに顔だけ笑う不気味な男を見つめながら、僕は考えられるだけの可能性を必死に脳内に巡らせていた。

バスの中の乗客が必死にバスの外へ逃げようと騒ぎ出した。悲鳴をキツカケに我に返った僕はレイチェルをいたであらう位置に目を彼女の向けて名前を叫んだ。

レイチェルの返事がない。悲鳴に混ざって聞こえないのかも知れないと、僕は彼女の名前を何回も叫んだ。

「一体なんなんだ！あんたは！！！」

僕の父親と同じぐらいの中年の男性が、声を荒げて男に掴みかかった。その瞬間、乗降口のドアが開き、外の空気が車内に吹き込んだ。その空気を察した乗客は、雪崩の様に乗降口に向かう。流れに押されてしまい僕もバスの外に放り出された。人の雪崩の中、僕は必死に降りてくる乗客の中にレイチェルの姿を探した。そして30人程の乗客がバスから出た瞬間、僕の知っている顔がバスの乗降口から出てきた。

どこか打ってしまったのか、苦痛の表情を浮かべバスを駆け降りたレイチェルを抱きしめ、「大丈夫か？どこか怪我したのか？」と彼女の体を見た。

「大丈夫、少しだけ腰を打っただけ」と返事をしたレイチェルを見て、ホッとした僕は運転手の男がいた運転席に視線をやった。

しかし、周囲に運転手の男の姿は無かった。赤いパトランプをクルクルと光らせ、自衛警察が次々にバスの周りを囲んだ。騒然とする主要幹線。先ほどもで順調に進んでいた人や車の経済の流れは完全に沈黙した。

この時、ノエルの完全平和の秩序が歴史上始めて乱されたのだっ

た。

騒然とする片側2車線の見通しの良い道路に不作為にバスが停車し、その周囲を自衛警察の車と救急車が集まり始めた。一番先に到着した救急車から隊員が3人降り、その中の1人に大丈夫ですか？と声をかけられた僕はとっさに右腕を見た。

特に違和感の無いいつもの右腕注射を打たれたであろう箇所にも何も異常は無かった。

男が僕に打った謎の注射。彼が言った「ハッピーバースデー」の意味。理解出来ない事が多すぎて、僕は考えるのを止めて救急隊員に事情を説明した。話を聞いた救急隊員は僕とレイチェルを救急車に案内し、近所の救急病院に移送した。

「エミリオ、あの人と何か話をしたの？」

レイチェルが不安そうな顔で僕の服の裾を掴んだ。

「意味が理解出来ない会話だったけどね」

僕は男の表情を思い出しながらレイチェルの不安を払拭しようと手を握り返した。

確実にターゲットは僕だったはずだ。あの謎の注射を僕に打つ為に、わざわざバスを乗っ取った。

あいつの目的はそれしか考えられない。

（なんで僕なんだ。僕に投与した薬品は何だったのか。）

僕の思考では結論に到達する事もできず、思わず拳を強く握っていた。それを見ていたレイチェルは少し不安そうになりながら、固

く握った拳の上に優しく手を被せてくれた。

救急車が高い警音を響かせながら幹線道路を疾走する。無線では周囲の被害状況や搬送先の病院の状況などがやり取りされていた。

とにかく検査を受けよう。と僕は混乱した思考を一旦仕切り直す事にした。

本来の予定であった訓練はこれからどうなるんだろう、と不安を覚えながら救急車は近隣の緊急医療センターに向かった。

緊急車両と化した救急車は、硬直した主要幹線を我が物顔で疾走していく。前方の車が救急車が近づく度に中央線から離れ、堂々とその中央線の上を走り抜けていく。腰を強打したレイチェルは担架で横になり、僕はそのすぐ隣にあった座席に座っていた。

つい先ほど起きた有り得ない出来事の事を僕はひらすら考えていた。掌は汗で濡れ、目線の焦点すら合わない。遺伝子工学の問題でも、こんなに思考を巡らせた事はないだろう。

（運転手だった男が何故僕を襲ったのか、その理由がわからない）

あの男は間違いなく僕をターゲットとしていた。わざわざバスを乗っ取り、訳の分からない注射を僕に使う為に。僕の体内に放たれた薬品はなんだ？何も解らないし、何も知らない僕を殺す必要があるのか？それとも無差別の犯行なのか？

だめだ理解が出来ない。一体何がどうなっているんだ！！ 思考が限界を超え、喉の奥から何かが飛び出しそうになった。それと同時に、汗だくの拳に冷たい何かが包み込んだ。

レイチェルの手だった。

狂いそうになった僕の表情を怯えた顔で「エミリオ？大丈夫？」

と弱々しく呟いた。

頭の中が一気に鮮明になり、僕は自分の脳が冷静に戻った事を理解した。

「大丈夫だよレイチェル、ごめんな」

いつもの顔に戻っていたのか、レイチェルは眉間を苦しそうに寄せながらも微笑してくれた。

そうだ。とりあえず生きている。

今から検査を受けて処置を施してもらえば良いんだ。遺伝子工学の発展で殆どの治療が可能になっている。何も心配する事はない。

僕はレイチェルの手を握り返し、自制心を取り戻す事に集中した。そして救急車両は医療センターの到着した。

救急医療センター

救急医療センターに到着した僕は、運転手の男が僕の体内に投与した薬品の成分を調査する為に精密検査を受けた。一時間程経過し、医療室に呼び出された僕は、担当する主治医の言葉に愕然とした。

「解らないって…どうゆう事なんですか!？」

「あなたに打たれたであろう薬品は我々が把握している薬品でもウイルスでもありません」

冷たい表情をした医者 of 眼鏡のレンズに、青白い顔をしたエミリオが映っていた。予期せぬ結果に動揺した僕は無意識に医者 of ネームプレートを見た。

エドワードⅡダリル。救急医療特務班主任

細く鋭い目つきと、キリツとした真面目そうな男性だ。体の線は細く色白だが、口調や冷静な態度からか威圧感のある雰囲気を漂わせた。

救急医療特務班とは、不治とされる病や、染色体異常などの現在の医学を以てしても解明されない病気を研究、治療する医療 of エキスパートだ。そのエキスパートが、完全にお手上げだと言っている。僕も学者 of 端くれではあるが、この現実 is 受け入れ難かった。

「確かにあなたの血液には、人間の体内では分泌されない物質が検出されています。ただ、この物質があなたの体、遺伝子にどの様な影響を及ぼすのか、現段階 of 私たちの医療では解析できません」

完璧と信じたこの世界の医療でも解析できない物質？そんな馬鹿な。なんでそんなもののあの男が持つてるんだ？どうしてそんなものを僕に？再び脳内の思考が爆発しそうになった。

「とにかく、精密検査をしましょう。その物質を解析します。今日から入院いただきます」

僕が叫びそうになる瞬間にエドワードという医者は淡々と話を進めた。それでも落ち着かない僕は鉄パイプの冷たい椅子から飛び出した。椅子は勢いよく後ろに倒れ、診療室の外にも聞こえる程の高い衝撃音を奏でた。

「落ち着ついてください」

隣に立っていた看護師が慌てて僕を静止する。エドワードは腹が立つほど冷静にカルテに何か記入していた。どうもこの男は好きになれそうにない。

「これが…俺の運命だったとでも言いたいのかあんたは！？」

「運命…。だとしたら、エミリオ君を助ける事が私の運命なのだろう。安心してくれ、必ず君を元の生活に戻してみせる」

エドワードは僕の肩を軽く叩いて笑ってみせた。

感傷的になり過ぎた、と反省した僕はそれ以降エドワードの話を黙って聞いた。腹の底から憎悪が湧いてくる。黒い泥の様な憎悪が。

あの男の忌まわしいニヤけた顔が脳裏に焼き付いている。顔だけじゃなく、声も鋭い眼孔も。

「言い方が悪いかもしれませんが、物質の性質が解明出来るまで、隔離に近い状態になってしまう。ウイルス性の何かかもしれないのでね。しばらくは辛いと思いますが、辛抱してください」

エドワードの説明が聞こえてきたが、頭には入っていなかった。

担架で運ばれる僕は、病院の廊下の無機質な天井をずっと眺めた。神様が僕に用意してくれた光輝く未来は、謎の男によって音を立って崩れた。

狼煙

薄暗くその広大な空間。ゴウンゴウン、と巨大な換気扇が風を切る音のみが聞こえている。道を照らしている赤黒い非常灯は、どこか不気味。その空間は全く出口の見えない長細い地下トンネルだった。トンネルの壁には無数の管がひしめき合っていた。

バスの運転手の制服を脱ぎ捨て、大量のジッポーライターのオイルを浴びせる。繊維にオイルが染み込んだ衣服に、そのままジッポーライターの火が放たれた。小さな爆発を思わせる丸い炎が立ち上がり、勢いよく燃え出した衣服は一瞬の内にカスと化してしまった。

「：第1段階はこれでクリア。あとはあいつは上手にやってくればイレイザー達も動く：か」

手に持った小さなメモ用紙を隅々まで確認しながら、くすぶっている火種でタバコに火を付けた男は、吸い込んだ煙を一気に口から吐き出した。

「あとは俺たちが賭けに勝つかどうかだな」

190cmはあろう身長に、厚い胸板。

ノースリーブの肩からスラッと伸びた両腕の筋肉は、芸術的な造形をしている。いや、これは何かを確実に行う為に鍛えられた筋肉であらう。

タバコの煙がトンネル内部の空気の流れに乗ってユラユラと流動する。艶なしの黒髪をバサツとかきあげ、鋭い眼孔をトンネルの上に向けた。

「さーノエルエデンさんよお。楽しい喧嘩をおっぱじめようぜえ」

この男の声は、歓喜に満ちていた。まるでこれから始まる宴を楽しみにしている子供の様な表情である。指でピンと跳ね、空中を舞った火のついたタバコは重力に従い弧を描いて地面に落下した。

薄暗く先の見えない巨大な地下トンネルを歩き出した男は、大声で笑いながら闇に消えていった。

解放

…もう何日が経過したのだろう。消毒液の慣れない匂いと、狭く無機質な白い部屋に閉じ込められ、もう僕が誰で何のために生きているのかすら解らなくなってきた。

両親は心配しているのだろう、レイチェルの怪我は大丈夫だったのか、遺伝子工学の現場研修はどうなったのか…。そんな事すら考える事も無くなった。

栄養剤が入った袋からポタポタと水滴が落ちていく。その水滴が管を通して僕の右腕から血液に混ざっていく。

（生きている？生かされている？それとも…）

生きる価値すらも無くなった僕をこの世界が見放してしまった。そう思える程僕の問題は不安定になっていた。僕を助けると宣言したエドワードはあれから顔すら出していない。この部屋のどこかに存在しているカメラで、僕の事を哀れに思っているに違いない。

（もう誰を信用していいのかもわからない…）

バンッ

意識の外で何かが弾ける音がした。どうやら部屋の外からの衝撃音だ。何かがぶつかった音の様だった。

（なんだろう…騒がしな。ああ、もしかしたら、解放されるのかも知れない）

僕はずっと待っていた。この部屋のドアを開けてくれる誰かを。

生きている実感を感じさせて欲しい。もうこんな所に居るのは嫌だった。

（そうだ。きっとそうだ！きっと治療法がわかったんだ！これで外に出れる！！）

ぼやけていた視界が段々とハッキリしてきた。誰かの影が僕を見つめている気がする。僕は助けを求める様に、その影に言葉を放とうとした。

「僕は…やっと…」

「どうなりたいんだ？」

意識がハッキリした瞬間に、僕が認識したのは、あのバスの運転手の男だった。鋭い眼孔に、狂気地味な笑みを浮かべる口元。低く、腹の底にズシリとくる声色。

（知っている。忘れるものか。バスの運転手だった男だ。）

期待を裏切られ、絶望の象徴になりつつあった存在に僕は声にならない声を出していた。

「あ…んた…！」

男はベッドで寝たきりになった僕を覗き込む様に前のめりになり、ベッドのフレームに体重を乗せた両手をかけていた。

「お前はとなりたかったんだ？」

男は何か嬉しそうに目を細めた。

「これがお前が望んだ人生だったか？絶望に満ちたこの白い部屋に閉じ籠もる事がお前の運命だったのか？」

言葉が放たれる度にベッドのフレームに体重がかかり、ギシ。ギシ。と音を出す。

「違…う！」

頭の中が真っ赤に染まり、腹の底から熱い何かが這い出そうとする。心臓の鼓動音がドンドン大きくなり、鼓動と同時に体内を巡り回る血液が沸騰する様に感じた。

「じゃあ何を望んだ！？お前が欲しているのは何なんだ！？」

ベッドに乗せた体重を一気に解き放ち今まで聞いた事の無い声量で男は吠えた。

僕はきつと解放されたかった。

理解すら出来ない異常な状況から。暖かくて安らぐ家族に会いたかった。この冷たい部屋で、何も出来ず、思考さえ停止させられ、

時の流れも感じる事も出来ない牢獄。この牢獄から一刻も早く解放されたかったのだ。この時、どん底に突き落とされた僕はすべてを解放した。

「自由だ！！僕は自由になりたいんだ！！」

ブワツと世界が広がり、真っ赤に染まった頭の中は霧が晴れる様に鮮明になった。

「僕はこんな所にいたくない！！外に出してくれ！家族の、レイチエルの声を聞かせてくれ！僕を自由にしてくれー！！！」

自由。

誰かがいつの間にか用意した、運命という言葉よりも僕が望んだ言葉だった。

黒 01

さっきまでは何もない静かな空間だった病室に複数と思われる足音が響く。この部屋に複数人が集結してくる足音だった。

「早い対応だな」

舌打ちをしながら、運転手の男は振り返って病室に侵入してきた多数の人間の顔を睨みつけた。

僕は意識はあったが、ボーっとして体に力が入らない。なんとか首を動かして、部屋の状況把握しようとした。明らかに医者では無い、黒一色のスーツを着た男達が、僕のベッドを中心に取り囲んでいた。

「助けて…ください…」

僕は最も近くにいたスーツの男に手を伸ばし、ベッドから這い出そうとし、スーツの男の1人が僕の差し出した腕を掴みんだ。

「エミリオ君、残念だ」

確かにそう聞こえた。男の言葉の意味を認識した瞬間、スーツの男が真後ろに顎を突き上げながら吹き飛んだ。白い部屋の壁にスーツの男は衝突し、人形の様に崩れ落ちた。

運転手の男の長い足が僕の目の前を横切っていた。バサッと髪をかきあげた運転手の男が僕に背中を向けてスーツの男達を再び睨みつけた。

「そうくると思ってたぜ。こっちの計画通りだ」

まるで僕をこの状況から護る為に僕とスーツの男達の間で割って入った男は、僕に背中を向けて周囲を見渡した。助けられると思っていたら襲われた。殺されると思った男に救われた。この状況を把握するのには今の僕には無理だった。

「今この瞬間から、彼はこのガンマが預かり受ける！」

刹那、スーツの男達は素早くナイフを構え腰を落とし、前傾姿勢になった。

「彼に指一本触れる事は許さねえ。もし触れるつもりなら、俺が遺伝子レベルまでズタズタにしてやる！」

ガンマと名乗った男が吠えたと同時に、右手でナイフを逆手に持ち、左手をナイフ側面に添えたスーツの男が、左足を一気に踏み込み間合いを詰めた。踏み込んだ左足が、バンッと床を鳴らした。

ガンマと名乗った男は、さらに速く右足を踏み込んでおり、ナイフが心臓に刺さる前にスーツの男の顔面を鷲掴みでした。

掴まれた顔面から真っ赤な液体が吹き出し、そのまま床に叩きつけられる。返り血がガンマの顔と僕のベッドシートに飛び移った。

「嘘だろ……!!? 殺したのか!??」

急に始まった乱闘に僕はベッドから飛び出した。

寝たきり状態で足腰の筋肉が落ちた僕は体重をささえる事が出来ず、そのまま体制を崩し、肩から崩れた僕はそのまま床にゆっくりと倒れ込んだ。

ガンマの右斜め前から3mほど離れた位置にいたスーツの男がベッドに飛び込み、あっという間にガンマの後ろに回り込んだ。ガン

マの背後からさらに飛び出し、スーツの男が僕の頭上に膝を突いて屈んだ。

（こいつが僕を守ってくれるのか？なんでだ！？）

目の前の黒い足元から、男の顔を見上げた。視界の焦点が合い僕の視界に入り込んだのは男の顔ではなく、ナイフの先端だった。

ドン！と音がし、僕は思わず目を閉じた。大きな音に続き、鈍く何かが碎ける異音が聞こえた。目をゆっくり開くと、ガンマは男の背骨をベッドごと踏みつけていた。

「触れようとすんなって言ったろうが…！」

悪魔を彷彿とさせる顔で唸るガンマを見た僕は、一気に体中の血が冷たくなる感覚を覚える。動物的な恐怖を感じた。そして、スーツの男が僕をナイフで殺そうとした事実にも気づいた。急に体中が震え出した僕はガンマの顔を見つめた。

「ちょっとは理解したか？今のお前の状況に？」

全く予期していなかった現実に啞然とする僕を見てガンマは笑った。

黒 02

生まれて始めて見た人間の死。それも一方的に奪われた死であった。まるで全身に窒素を浴びせられたみたいに僕の体は固まっちゃっていった。

「お前は、もうノエルでは生きてはいけない人間になっちゃった。だからこいつらはお前を殺そうとしている。そして俺はお前を守る為にここにいます。現状把握はできたか？」

僕にゆっくり語りかけながら、ガンマはスーツの男達の動きを警戒している。1人1人の細かい動きに全神経が反応しているようだ。肌が痺れるようなピリピリした雰囲気の中で、何故だか僕も冷静に思考を巡らせた。僕はまず、根底の疑問をガンマに問うた。

「あんたの目的はなんだ…？」

「いい反応だ。意外と冷静だな。もっと泣きじゃくって助けを求めろと思ってたぜえ」

嬉しそうに笑うガンマに、訳が解らない僕は苛立ちを覚える。

「答えになってない、あんたは何者だ！？この状況を作り出したのはあんたじゃないのか!？」

「あー、質問が増え過ぎだなあ。物事には順序ってもんがある、とりあえずゆっくり話そう。コーヒーおごってやるよ!」

少しだけ腰を落としたガンマに、スーツの男たちは電気が走る様に反応し、半歩後ろに下がった。

「とりあえず生き残るぞ、何も知らないまま死にたくはないだろ？」
生き残る。その言葉を聞いた僕は、思わず頷いた。

狭い空間でナイフを構えた複数人に囲まれても、ガンマの余裕綽々な態度は変わらない。しかし先程の戦闘を考えると彼の余裕には説得力がある。高い身長と威圧感のある声。動物的な本能を剥き出しにした瞳孔。服の上からでも想像がつく、完成された筋肉。

ガチンツと鈍い音が部屋の中に響く。ガンマの両腕から発せられた異音と同時に、両腕の色素がだんだん浅黒くなる。異常な光景に、僕は目を疑った。人間の色素が変わる瞬間なんて見た事も無いし聞いた事もなかった。

「腕が：黒くなった？」

ガンマの両腕の色素は完全な黒に変化した。血管が沸騰し水蒸気が発生しているのか、黒い腕から湯気が上がる。ガンマが感覚を確かめる様に指の関節を動かすとギシギシと音を立てた。

スーツの男の1人が、限界まで体を屈めた一瞬、一気にガンマとの間合いを縮めた。強く踏み出された右足からの一歩で、部屋のタイルは縦に割れる。

踏み込みの速度と全体重を乗せるナイフによる突きは、僕の目には捉える事が出来ない速度だった。

そんな超速の突きに対し、ガンマの左手が突撃してくるナイフを捉えていた。ナイフはガンマの黒い左に接触した。

ガチャン！と音を発し、ナイフが粉々に砕け、その衝撃が伝わったスーツの男の腕が曲がり、相殺されない衝撃は体中の骨を砕いた。内臓も衝撃に耐えきれなかったのか、スーツの男の口から尋常じゃない量の血液を吐き出した。

「おら、どうした？そのヤワなナイフで俺をズタズタにしてみろよ」

ぐったりした男をそのまま左腕で風払い、ガンマはゆっくりと前進した。ガンマの黒い腕は、さらに熱気を帯び蒸気を放つ。返り血が蒸発しているのか、蒸気の色は赤みがかっていた。

スーツの男達は、すでに僕を狙う余裕すら無くなったのか、全員がガンマの方に体を向けていた。仲間が2人殺されたのにも関わらず、全く動じる様子もない男達。

「なんだよこれ：狂ってる。こんなにも人が簡単に：」

僕は目の前で起きている異常事態をこれ以上直視する事が出来ず、さっきまで寝ていたベットのシーツに包まった。

誰かが床を駆ける。そして異音が響く。血が床に滴る生々しい音、骨が碎かれる音、肉が避ける音。ガンマの狂気めいた笑い声、誰かが苦しむ声。

薄いシーツごしに、僕は視覚以外の感覚で人間の死を感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6618z/>

ノエルエデン～平和の代償～

2011年12月25日18時55分発行